

平成 31年 2月 13日

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院看護福祉学研究科長 殿

主査 山田 律子

副査 遠藤 英子

副査 佐々木 栄子

副査 三国 久美



このたび 齋藤 道子 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

- 1 学位論文題目 個室隔離されている多剤耐性菌患者への心理的ケアを重視した看護師教育プログラムの開発
- 2 論文要旨 すでに配布のとおり

3 学位論文審査の要旨

医療の発達に伴い、院内では易感染者の増加、抗菌薬の使用から多剤耐性菌を保有する患者が増えている。多剤耐性菌による伝播は病状をより重篤なものにしており、個室隔離の実施が推奨されている。個室隔離は患者の心理面に有害な影響を及ぼす上に、多剤耐性菌感染による被害者意識などに対する心理的ケアが不可欠である。しかし、看護師に対する教育プログラムがなく、心理的ケアが不十分な現状がある。本研究では、個室隔離されている多剤耐性菌患者への心理的ケアを重視した看護師教育プログラムを開発・実施し、その有効性を明らかにすることを目的とした。方法論として、インストラクショナルデザイン(instructional design :ID)の分析(Analyze)、設計(Design)、開発(Development)、実施(Implementation)、評価(Evaluation)の5つの構成要素から成る ADDIE モデルを用いて、看護師教育プログラムを開発し、比較群付き前後比較試験(pretest-posttest design with comparison group)によって本プログラムの有用性を検討した。看護師教育プログラムの開発には、国内外の十分な文献レビューと専門家会議、副論文である調査結果から得られたデータをもとにした。次に本プログラムの有用性の検証については、実施前後で実施群が比較群と比べて有意な効果が認められた。

本研究は周到な計画のもとに遂行されたことが窺え、その内容には独自性と先駆性、発展性が認められる。本審査委員会は総合的に判断し、本論文が博士論文としての水準を有しており、博士の学位を授与するに値するとの結論を得た。

4 最終試験の要旨

審査は、プレゼンテーション、質疑応答、博士論文審査基準による評価、審議というプロセスを経て行われた。プレゼンテーションは、内容が明確に伝わるものであった。審査委員からの質疑に対する申請者の応答は、極めて的を射たものであった。本研究の発展に向けての質疑応答において、今後は個室隔離患者用のプログラムと、多剤耐性菌患者用のそれと、どちらに重点を置くのか検討の上、本結果をもとに構造化することの重要性が確認された。

審査の結果、本学位論文が新規性と独創性に富み、感染看護分野をはじめとする看護実践に大きく貢献するものであり、今後の発展性も期待される優れた価値を有することを全審査委員が一致して認めた。

以上の結果 齋藤 道子 は、博士(看護学) の学位を授与する資格が ある と判定する。
博士(臨床福祉学) ない